

# キャンプファイヤー



宵闇の中、豊かな立田山の自然に抱かれ、キャンプファイヤーの炎に照らされた子ども達の顔は輝いています。

キャンプファイヤーは、子ども達が楽しみにしている夜の定番プログラムの一つですが、常に「ヤケド」や「火災」の危険性も潜んでいます。

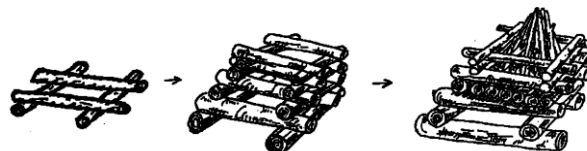
薪の量、やぐら組み方、トーチの作り方、点火や消火方法、残り灰の処理方法に関する正しい知識や技法を身につけて、安全で楽しいキャンプファイヤーを計画してください。

## 利用案内

- (1) キャンプファイヤーができる場所は「森のサークル」のみです。
- (2) キャンプファイヤーをする場合は、必ず「キャンプファイヤー責任者（火気責任者）」を決め、事前に提出する「活動計画書」に氏名を記載してください。
- (3) 火災警報や乾燥注意報が発表されているとき、風が強いときなど、火災発生の危険があると判断したときは、キャンプファイヤーを禁止することがあります。

## 準備作業

- (1) センター職員にキャンプファイヤーの開始・終了時間を告げ、キャンプファイヤー場の水道の止水栓を開いてもらい、防火用具セット（ホース、バケツ、火ばさみ、平スコップ）を借り受ける。➡ 水道蛇口に消火用の「ホース」を繋ぎます。
- (2) やぐら（キャンプファイヤー）は、最初に、炉の中央に太い薪（長さ50～60cm）を「二」の字型に置き、その上に薪の間隔を狭めながら2本ずつ重ねて「井」の字型にやぐらを組む。➡ やぐらの高さは50cm程度を目安にする。➡ 最も勢いのあるとき、炎の高さはやぐらの約3倍（1.5m）になる。（薪の量が多いと、燃え終わるまで時間がかかり、燃え残りもたくさん出ます。）
- (3) やぐらの中央に、新聞紙、細く割った木や竹、枯れ枝などを入れると火がつきやすくなる。➡ 灯油を浸した新聞紙を入れる場合は灯油の量に注意する。（やぐらに直接、灯油をふりかけないこと）
- (4) トーチ棒は、帯状にしたボロ布を棒にしっかりと巻く。➡ 針金でしっかりと縛り固定する。➡ 灯油は巻いた布の先端3分の1程度に浸み込ませる。➡ 灯油が垂れないよう、布の部分を下にして30分程度乾かして使う。
- (5) いよいよキャンプファイヤーの始まり。火起こし機で火種を作ったり、女神が現れて点火したり、歌やゲームを楽しんだり子ども達は大喜びです。でも、ヤケドや火災防止への気配りはくれぐれもお忘れなく。



## 後片付け

- (1) 燃え残り（灰や木片など）は、平スコップで「残灰置場」に移し、ホースで水を掛けて消火する。➡ 熱い炉石に急に水を掛けると炉石が割れます。燃え残りは、必ず「残灰置場」に移して消火してください。
- (2) 燃え残りが多いときは炉の中央に集め、ドラム缶（キャップ）を被せておきます。燃え残りが少なくなったら「残灰置場」に移して消火してください。
- (3) キャンプファイヤー終了後も、ホースは水道蛇口に繋いだままにしておいてください。
- (4) 翌朝、完全消火を確認して、防火用具セット（ホース、バケツ、火ばさみ、平スコップ）をセンター職員に返却します。使用しなかった薪はお持ち帰りください。